

随 想

桜から見る日本社会

張 宇

桜が日本のシンボルの花といわれている。一株の花は弱々しく見えるが、数え切れないほどの花からなる桜の雲は実に壯観そのものである。日本人もそうである。一人一人は謙遜で、才覚も同じ学歴の外国人と大きな違いはないが、多くの日本人からなる団体となると、整然たる軍隊のように大きな力を持つようになる。二年以上日本にいて、たくさんの日本人と接触した私にはこの点について深く感じられている。

私が知っている留学生の一人は東京へ行く飛行機の中でこのような経験があった。彼の隣に年を取ったおばあさんが座っていた。雑談していたうちに、中国人だと彼が言った。それを聞いたおばあさんはすぐにおじぎをして、「すみません」と彼に何回も謝った。なぜなのかとびっくりした時、「過去の戦争のことは本当に申し訳ございませんでした」とおばあさんは言った。その口調と表情では、おばあさんはまるで日本の外交官のように見えた。また、去年友達と近所にあるレストランで食事をした。オーダーをはっきり言わなかったので店員さんが違う料理を持ってくれた。料理が間違えたことに気づいて、店員さんに言ったら、店員さんはすぐ「すみません」と言ってくれた。それにオーダーのものを取り替えてくれた。おばあさんは過去の戦争のため中国留学生に詫びを言った時、自分を日本という国と結びつけ、また、店員さんは私達に謝った時、自分がそのレストランを代表しているのだらうと私はそう思った。

そして日本語の中にはこのような表現がある。自分が所属している会社や研究所を紹介する時、日本人は必ず「うちの会社」とか「うちの研究所」とか言う。「会社」という言葉自体も、「みんなが生きる集団」の意味を持っているように聞こえる。日本事情の研究者はこういう観念を「集団意識」と呼ぶ。また、それが民族の凝集力と仕事の高能力の源で、日本国民性の特徴だという。たとえば会社や研究所などの職場では、地位や能力の差があるにもかかわらず、職員一同が一致して、仕事をうまくやるように努力している。逆に中国の場合は

一人として才能や知恵を持つ人は多くいるが、同じ職場にいと、互いに才能を嫉妬したり、足下をくずしたりすることが少なくないのである。中国と比べて、日本の集団意識は既に日本社会の中にしみ込み、国民の日常生活に現れているのである。歴史を観れば、集団意識はずっと昔からあることが分かった。原始社会では生産力も人間の知恵もとても低かった。協力しなければ、人間は獣に襲われ、自然災害をこうむり、最後に絶滅する運命にあった。それ以来集団生活が始まった。そして社会は今日まで進んできた。現代社会は互いに関連し合って依存し合う、もっと広い範囲で集団と言えよう。

今、「日本は友達のない金持ちだ」という恐れがずいぶんあるという。私は日本に対し何か望ましいことがあると言え、日本人の社会生活の中に現れてきた個人と国家との面での集団意識を、桜の盛るように、もっと広くて美しい方向に拡大してほしいのである。言いかえれば、自分を会社、自分を国家と結びつけるように、全世界が一つの大きな集団だと思い、自分や国家の利益と運命を世界の国や人々とつながってほしいのである。

(名古屋大学大学院医学研究科学生)